
【テキスト中に現れる記号について】

《 》：ルビ
(例) 獅子《しし》

|：ルビの付く文字列の始まりを特定する記号
(例) 新|希臘《ギリシア》

[#]：入力者注 主に外字の説明や、傍点の位置の指定
(数字は、JIS X 0213の面区点番号、または底本のページと行数)
(例) [# 「王+連」、第3水準1-88-24] 馬《デンマーク》

上

幾頭の獅子《しし》の挽《ひ》ける車の上に、勢《いきおい》よく突立ちたる、女神《によしん》パワリアの像は、先王ルウド斗ヒ第一世がこの凱旋門《がいせんもん》に据《す》ゑさせしなりといふ。その下《もと》よりルウド斗ヒ町を左に折れたる処に、トリエント産の大理石にて築《きず》きおこしたるおほいへあり。これパワリアの首府に名高き見ものなる美術学校なり。校長ピロッチイが名は、をちこちに鳴りひびきて、独逸《ドイツ》の国々はいふもさらなり、新|希臘《ギリシア》、伊太利《イタリア》、[# 「王+連」、第3水準1-88-4] 馬《デンマーク》などよりも、ここに来《きた》りつどへる彫工《ちょうこう》、画工数を知らず。日課を《お》へて後《のち》は、学校の向ひなる、「カフフェエ・ミネルワ」といふ店に入りて、珈琲《カフフェー》のみ、酒くみかはしなどして、おもひおもひの戯《たわぶれ》す。こよひも瓦斯燈《ガスとう》の光、半ば開きたる窓に映じて、内には笑ひさざめく声聞ゆるをり、かどにきかかりたる二人あり。

先に立ちたるは、かち色の髪《かみ》のそそけたるを厭《いと》はず、幅広き襟飾《えりかざり》斜《ななめ》に結びたるさま、誰《た》が目にも、ところの美術|諸生《しょせい》と見ゆるなるべし。立《た》ち住《どま》りて、後《あと》なる色黒き小男に向ひ、「ここなり」といひて、戸口をあけつ。

先づ二人が面《おもて》を撲《う》つはたばこの烟《けぶり》にて、遽《にわか》に入りたる目には、中《なか》なる人をも見わきがたし。日は暮れたれど暑き頃なるに、窓|悉《ことごと》くあけ放《はな》ちはせで、かかる烟の中に居るも、習《ならい》となりたるなるべし。「エキステルならずや、いつの間にか帰りし。」「なほ死なでありつるよ。」など口々に呼ぶを聞けば、彼《かの》諸生はこの群《むれ》にて、馴染《なじみ》あるものならむ。その間、あたりなる客は珍らしげに、後につきて入来《いりきた》れる男を見つめたり。見つめらるる人は、座客《ざかく》のなめなるを厭ひてか、暫《しば》し眉根《まゆね》に皺《しわ》寄せたりしが、とばかり思ひかへししにや、僅《わずか》に笑《えみ》を帯びて、一座を見度《みわた》しぬ。

この人は今着きし汽車にて、ドレスデンより来にければ、茶店《ちゃみせ》のさまの、かしことここと殊《こと》なるに目を注ぎぬ。大理石の円卓《まるづくえ》幾つかあるに、白布《しらぬの》掛けたるは、夕餉《ゆうげ》畢りし迹《あと》をまだ片付けざるならむ。裸なる卓に倚《よ》れる客の前に据ゑたる土やきの盃《さかずき》あり。盃は円筒形《えんとうがた》にて、爛徳利《かんどくり》四つ五つも併せたる大《おおい》さなるに、弓なりのとり手つけて、金蓋《かなふた》を蝶番《ちょうつがい》に作りて覆《おお》ひたり。客なき卓に珈琲|碗《わん》置いたるを見れば、みな倒《さかしま》に伏せて、糸底《いとそこ》の上に砂糖、幾塊《いくかたまり》か盛れる小皿載せたるもをかし。

客はみなりも言葉もさまざまなれど、髪もけづらず、服も整《ととの》へぬは一樣なり。されどあながち卑しくも見えぬは、さすが芸術世界に遊べるからにやあるらむ。中にも際立《きわだ》ちて賑《にぎわ》しきは中央なる大卓《おおづくえ》を占めたる一群《ひとむれ》なり。よそには男客のみなるに、独《ひとり》ここには少女《おとめ》あり。今エキステルに伴はれて来《こ》し人と目を合はせて、互に驚きたる如《ごと》し。

来し人はこの群に珍らしき客なればにや。また少女の姿は、初めて逢《あ》ひし人を動かすに余《あまり》あらむ。前庇《まえびさし》広く飾なき帽《ぼう》を被《か》ぶりて、年は十七、八ばかりと見ゆる顔《かん》ばせ、エヌスの古彫像を欺《あざむ》けり。そのふるまひには自《おのずか》ら気高《けだか》き処ありて、かいなでの人と覚えぬ。エキステルが隣の卓なる一人の肩を拍《う》ちて、何事をか語《かたり》ゐたるを呼びて、「こなたには面白き話一つする人なし。この様子にては骨牌《カルタ》に遁《のが》れ球突《たまつき》に走るなど、忌《いま》はしき事を見むも知られず。おん連れの方と共に、こなたへ来たまはずや。」と笑みつつ勸《

すすむる、その声の清きに、いま来し客は耳に傾《かたぶ》けつ。

「マリイの君のあ玉ふ処へ、誰《たれ》が行かざらむ。人々も聞け、けふこの『ミネルワ』の仲間に入れむとて伴《ともな》ひたるは、巨勢《こせ》君とて、遠きやまとの画工なり。」とエキステルに紹介せられて、随来《したがいき》ぬる男の近寄りて会釈《えしゃく》するに、起《た》ちて名告《なの》りなどするは、外国人《とつくにびと》のみ。さらぬは坐したるままにて答ふれど、侮《あなど》りたるにもあらず、この仲間の癖《くせ》なるべし。

エキステル、「わがドレスデンなる親族《みうち》訪《たず》ねにゆきしは人々も知りたり。巨勢君にはかしこなる画堂にて逢ひ、それより交《まじわり》を結びて、こたび巨勢君、ここの美術学校に、しばし足を駐《とど》めむとて、旅立ち玉ふをり、われも俱《とも》にかへり路《じ》に上りぬ。」人々は巨勢に向ひて、はるばる来《き》ぬる人と相識《あいし》れるよろこびを陳《の》べ、さて、「大学にはおん国人《くにびと》も、をりをり見ゆれど、美術学校に来たまふは、君がはじめなり。けふ着きたまひしことなれば、『ピナコテエク』、また美術会の画堂なども、まだ見玉はじ。されどよそにて見たまひし処にて、南に独逸《ドイツ》の画《え》を何とか見たまふ。こたび来たまひし君が目的は奈何《いかに》。」など口々に問ふ。マリイはおしとどめて、「しばししばし、かく口を揃《そろ》へて問はるる、巨勢君とやらむの迷惑、人々おもはずや。聞かむとならば、静まりてこそ。」といふを、「さても女主人《おみなあるじ》の厳しさよ、」と人々笑ふ。巨勢は調子こそ異様《ことざま》なれ、拙《つたな》からぬ独逸語にて語りいでぬ。

「わがミュンヘンに来《こ》しは、このたびを始《はじめ》とせず。六年《むとせ》前にここを過ぎて、索遜《ザクセン》にゆきぬ。そのをりを『ピナコテエク』に懸けたる画を見しのみにて、学校の人々などに、交を結ぶことを得ざりき。そは故郷を出でし時よりの目あてなるドレスデンの画堂へ往《ゆ》かむと、心のみ急がれしゆゑなり。されど再びここに来て、君らがまとゐに入ることとなりし、その因縁《いんねん》をば、早く当時に結びぬ。」

「大人気《おとなげ》なしといひけたで聞き玉へ。謝肉《しゃにく》[# 「謝肉」の左に「カルネウル」とルビ、42-14] の祭、はつる日の事なりき。『ピナコテエク』の館《やかた》出でし時は、雪いま晴れて、街《ちま》の中道《なかみち》なる並木の枝は、一《ひと》つー《びと》つ薄き氷にてつつまれたるが、今点ぜし街燈に映じたり。いろいろの異様な衣《ころも》を着て、白くまた黒き百眼《ひやくまなこ》掛けたる人、群をなして往来《ゆきき》し、ここかしこなる窓には毛氈《もうせん》垂れて、物見としたり。カルルの辻《つじ》なる『カフェエ・ロリアン』に入りて見れば、おもひおもひの仮装色を争ひ、中に雑《まじ》りし常の衣もはえある心地《ここち》す。みなこれ『コロッセウム』、『エクトリア』などいふ舞踏場のあくを待てるなるべし。」

かく語る処へ、胸当《むねあて》につづけたる白に前垂《まえだれ》掛けたる下女《はしため》、麦酒《ビール》の泡だてるを、ゆり越すばかり盛りたる例の大杯《おおさかずき》を、四つ五つづつ、とり手を寄せてもろ手に握りもち、「新しき樽《たる》よりとおもひて、遅《おそ》うなりぬ。許したまへ」とことわりて、前なる杯飲みほしたりし人々にわたすを、少女、「ここへ、ここへ」と呼びちかづけて、まだ杯持ため巨勢が前にも置かず。巨勢は一口飲んで語りつづけぬ。

「われも片隅なる一榻《いっとう》に腰掛けて、賑はしきさま打見るほどに、門《かど》の戸あけて入《い》りしは、きたなげなる十五ばかりの伊太利栗《イタリアぐり》うりにて、焼栗盛りたる紙筒《かみづつ》を、堆《うずたか》く積みし箱かいこみ、『マロオニイ、セニョレ。』（栗めせ、君）と呼ぶ声も勇ましき、後につきて入りしは、十二、三と見ゆる女《おみな》の子《こ》なりき。旧《ふる》びたる鷹匠頭巾《たかじょうずきん》[# 「鷹匠頭巾」の左に「カプウチェ」とルビ、43-14]、ふかぶかと被《かぶ》り、凍《こご》えて赤うなり両手さしのべて、浅き目籠《めぐ》の縁《ふち》を持ちたり。目籠には、常盤木《ときわぎ》の葉、敷き重ねて、その上に時ならぬ堇花《すみれ》の束を、愛らしく結びたるを載せたり。『ファイルヘン、ゲフェルリヒ』（すみれめせ）と、うなだれたる首《こうべ》を擡《もた》げもあへでいひし声の清さ、今に忘れず。この童《わらべ》と女の子と、道連れとは見えねば、童の入るを待ちて、これをしほに、女の子は来しならむとおもはれぬ。」

「この二人のさまの殊《こと》なるは、早くわが目を射《い》き。人を人ともおもはぬ、殆《ほとんど》憎げなる栗うり、やさしくいとほしげなるすみれうり、いづれも群《むれ》ある人の間を分けて、座敷の真中《まなか》、帳場《ちょうば》の前あたりまで来し頃、そこに休みゐたる大学々生らしき男の連れたる、英吉利種《イギリスだね》の大狗《おおいぬ》、いままで腹這《はらば》ひてゐたりしが、身を起して、背をくぼめ、四足《よつあし》を伸ばし、栗箱に鼻さし入れつ。それと見て、童の払ひのけむとするに、驚きたる狗、あとに附きて来し女の子に突当れば、『あなや、』とおびえて、手に持ちし目籠とり落したり。茎《くき》に錫紙《すすがみ》巻きたる、美しきすみれの花束、きらきらと光りて、よもに散りばふを、好《よ》き物得つと彼《かの》狗、踏みじりては、[# 「口+銜」、第4水準2-4-42] 《くわ》へて引きちぎりなどす。ゆかは暖炉《だんろ》の《ぬく》まりにて解けたる、靴の雪にぬれたれば、あたりの人々、かれ笑ひ、これ罵《ののし》るひまに、落花狼藉《らっかつろうぜき》、なごりなく泥土に委《ゆだ》ねたり。栗うりの童は、逸足《いちあし》出《いだ》して逃去り、学生らしき男は、欠《あく》びしつづ狗を叱《しっ》し、女の子は呆《あき》れて打守《うちまも》りたり。この堇花うりの忍びて泣かぬは、うきになれて涙の泉に涸《か》れたりしか、さらずは驚き惑《まど》

ひて、一日の生計《たつき》、これがために已《や》まむとまでは想到《おもいいた》らざりしか。しばしありて、女の子は碎《くだ》けのこりたる花束二つ三つ、力なげに拾はむとすると、帳場にある女の知らせに、この主人《あるじ》出でぬ。赤がほにて、腹突きいだしたる男の、白き前垂したるなり。太き拳《こぶし》を腰にあてて、花売りの子を暫し睨《にら》み、『わが店にては、暖簾師《のれんし》〔#「暖簾師」の左側に「ハウジレル」とルビ、45-5〕めいたるあきなひ、せさせぬが定《さだめ》なり。疾《と》くゆきぬ。』とわめきぬ。女の子は唯《ただ》言葉なく出でゆくを、満堂の百眼《ひやくまなこ》、一滴《ひとしずく》の涙なく見送りぬ。』

「われは珈琲代の白銅貨を、帳場の石板の上に擲《な》げ、外套《がいう》取りて出でて見しに、花売の子は、ひとりさめさめと泣きてゆくを、呼べども顧《かえり》みず。追付きて、『いかに、善《よ》き子、堇花のしる取らせむ、』といふを聞きて、始めて仰見《あおぎみ》つ。そのおもての美しさ、濃き藍《あい》いろの目には、そこひ知らぬ憂《うれい》ありて、一たび顧みるときは人の腸《はらわた》を断たむとす。囊中《のうちゅう》の『マルク』七つ八つありしを、から籠《かご》の木《こ》の葉《は》の上に置きて与へ、驚きて何ともいはぬひまに、立去りしが、その面《おもて》、その目、いつまでも目に付きて消えず。ドレスデンにゆきて、画堂の額《がく》うつすべき許《ゆるし》を得て、エヌス、レダ、マドンナ、ヘレナ、いづれの図に向ひても、不思議や、すみれ売のかほばせ霧の如《ごと》く、われと画額との間に立ちて障礙《しょうげ》をなしつ。かくては所詮《しょせん》、我|業《わざ》の進まむこと覚束《おぼつか》なしと、旅店の二階に籠《こ》もりて、長椅子《ながいす》の覆革《おおいかわ》に穴あけむとせし頃もありしが、一朝《いっちょう》大勇猛心を奮《ふる》ひおこして、わがあらむ限《かぎり》の力をこめて、この花売の娘の姿を無窮《むきゅう》に伝へむと思ひたちぬ。さはあれどわが見し花うりの目、春潮を眺《なが》むる喜《よろこび》の色あるにあらず、暮雲を送る夢見心あるにあらず、伊太利《イタリア》古跡の間に立たせて、あたりに一群《ひとむれ》の白鳩《しろばと》飛ばせむこと、ふさはしからず。我空想はかの少女《おとめ》をラインの岸の巖根《いわね》にをらせて、手に一張《ひとはり》の琴を把《と》らせ、嗚咽《おえつ》の声を出《いだ》させむとおもひ定めにき。下《した》なる流にはわれ一葉《いちよう》の舟を泛《うか》べて、かなたへむきてもろ手高く挙げ、面《おもて》にかぎりなき愛を見せたり。舟のめぐりには数知られぬ、『ニックセン』、『ニユムフェン』などの形|波間《なみま》より出でて擲掄《やゆ》す。けふこのミュンヘンの府《ふ》に来て、しばし美術学校の『アトリエ』借らむとするも、行李《こり》の中、唯この一画藁《いちがこう》、これをおん身ら師友の間に議《はか》りて、成しはてむと願ふのみ。』

巨勢はわれ知らず話しいりて、かくいひ畢《おわ》りし時は、モンゴリア形《がた》の狭き目も光るばかりなりき。「いしくも語りけるかな、」と呼ぶもの二人三人《ふたりみたり》。エキステルは冷淡に笑ひて聞《きき》ゐたりしが、「汝たちもその図見にゆけ、一週がほどには巨勢君の『アトリエ』ととのふべきに」といひき。マリイは物語の半《なかば》より色をたがへて、目は巨勢が唇にのみ注ぎたりしが、手に持ちし杯《さかずき》さへ一たびは震ひたるやうなりき。巨勢は初《はじめ》このまとゐに入りし時、已《すで》に少女の我すみれうりに似たるに驚きしが、話に聞きほれて、こなたを見つめたるまなざし、あやまたずこれなりと思はれぬ。こも例の空想のしわざなりや否《いな》や。物語畢りしとき、少女は暫し巨勢を見やりて、「君はその後《のち》、再び花うりを見たまはざりしか、」と問ひぬ。巨勢は直《ただ》ちに答ふべき言葉を得ざるやうなりしが。「否。花売を見しその夕《ゆうべ》の汽車にてドレスデンを立ちぬ。されどなめなる言葉を咎《とが》め玉はずばきこえ侍《はべ》らむ。我すみれうりの子にもわが『ロオレイ』の画《え》にも、をりをりたがはず見えたまふはおん身なり。」

この群は声高く笑ひぬ。少女、「さては画額ならぬ我姿と、君との間にも、その花うりの子立てりと覚えたり。我を誰とかおもひ玉ふ。」起ちあがりて、真面目《まじめ》なりとも戯《たわぶれ》なりとも、知られぬやうなる声にて。「われはその堇花《すみれ》うりなり。君が情《なさけ》の報《むくい》はかくこそ。」少女は卓越《たくご》しに伸びあがりて、俯《うつむ》きゐたる巨勢が頭《かしら》を、ひら手にて抑へ、その額《ぬか》に接吻《せっぷん》しつ。

この騒ぎに少女が前なりし酒は覆《くつが》へりて、裳《もすそ》を浸《ひた》し、卓の上にこぼれたるは、蛇の如く這《は》ひて、人々の前へ流れよらむとす。巨勢は熱き手掌《たなごこ》を、両耳の上におぼえ、驚く間もなく、またこれより熱き唇、額に触れたり。「我友に目を廻させたまふな。」とエキステル呼びぬ。人々は半ば椅子より立ちて「いみじき戯《たわぶれ》かな、」と一人がいへば、「われらは継子《ままこ》なるぞくやしき、」と外《ほか》の一人いひて笑ふを、よそなる卓よりも、皆興ありげにうち守《まも》りぬ。

少女が側《そば》に坐したりし一人は、「われをもすさめ玉はむや、」といひて、右手《めて》さしのべて少女が腰をかき抱きつ。少女は「さても礼儀知らずの継子どもかな、汝らにふさはしき接吻のしかたこそあれ。」と叫び、ふりほどきて突立ち、美しき目よりは稲妻《いなずま》出づと思ふばかり、しばし一座を睨《にら》みつ。巨勢は唯|呆《あき》れに呆れて見あたりしが、この時の少女が姿は、堇花うりにも似ず、「ロオレイ」にも似ず、さながら凱旋門上のバウリアなりと思はれぬ。

少女は誰《た》が飲みほしけむ珈琲碗に添へたりし「コップ」を取りて、中なる水を口に銜《ふく》むと見えしが、唯|一〔#「口+饌のつくり」、第4水準2-4-37〕《ひとふき》。「継子よ、継子よ、汝ら誰《たれ》

美術の継子ならざる。フィレンチェ派学ぶはミケランジェロ、モンチイが幽霊、和蘭《オランダ》派学ぶはルウベンス、ファン・ダイクが幽霊、我国のアルブレヒト・デュウレル学びたりとも、アルブレヒト・デュウレルが幽霊ならぬは稀《まれ》ならむ。会堂に掛けたる『スツディ』二つ三つ、値段《ねだん》好く売れたる暁《あかつき》には、われらは七星われらは十傑、われらは十二使徒と擅《ほしいまま》に見たてしてのわれぼめ。かかるえり屑《くず》にミネルワの唇いかで触れむや。わが冷たき接吻にて、満足せよ。」とぞ叫びける。

噴掛《ふきか》けし霧の下なるこの演説、巨勢は何事とも弁《わきま》へねど、時の絵画をいやしめたる、諷刺《ふうし》ならむとのみは推測《おしはか》りて、その面《おもて》を打仰ぐに、女神バウリアに似たりとおもひし威厳少しもくづれず、言畢《いいおわ》りて卓の上におきたりし手袋の酒に濡れたるを取りて、大股《おおまた》にあゆみて出でゆかむとす。

皆すさまじげなる気色《けしき》して、「狂人」と一人いへば、「近きに報《むくい》せでは已《や》まじ」と外の一人いふを、戸口にて振りかへりて。「遺恨に思ふべき事は、月影にすかして見よ、額に血の迹《あと》はとどめじ。吹きかけしは水なれば。」

中

あやしき少女《おとめ》の去りてより、ほどなく人々あらけぬ。帰《かえ》り路《じ》にエキステルに問へば、「美術学校にて雛形《モデル》となる少女の一人にて、『フロイライン』ハンスルといふものなり。見たまひし如く奇怪なる振舞《ふるまい》するゆゑ、狂女なりともいひ、また外の雛形娘と違ひて、人に肌見せねば、かたはにやといふもあり。その履歴知るものなけれど、教《おしえ》ありて気象よの常ならず、[# 「さんずい + 于」、第3水準1-86-49]《けが》れたる行《おこない》なければ、美術諸生の仲間には、喜びて友とするもの多し。善《よ》き首《こうべ》なることは見たまふ如し。」と答へぬ。巨勢《こせ》、「我画かくにもようあるべきものなり。『アトリエ』ととのむ日には、来《こ》よと伝へたまへ。」エキステル、「心得たり。されど十三の花売娘にはあらず、裸体の研究、危《あやう》しとはおもはずや。」巨勢、「裸体の雛形せぬ人と君もいひしが。」エキステル、「現《げ》にいはれたり。されど男と接吻したるも、けふ始めて見き。」エキステルがこの言葉に、巨勢は赤うなりしが、街燈暗き「シルレル・モヌメント」のあたりなりしかば、友は見ざりけり。巨勢が「ホテル」の前にて、二人は袂《たもと》を分ちぬ。

一週ほど後《のち》の事なりき。エキステルが周旋にて、美術学校の「アトリエ」一間《ひとま》を巨勢に借されぬ。南に廊下ありて、北面の壁は硝子《ガラス》の大窓《おおまど》に半《なかば》を占められ、隣の間とのへだてには唯 | 帆木綿《ほもめん》の幌《とばり》あるのみ。頃はみな月半ばなれど、旅立ちし諸生多く、隣に人もあらず、業《わざ》妨ぐべき憂《うれい》なきを喜びぬ。巨勢は画額の架《だい》[# 「架」の左に「スタッファージュ」とルビ、50-11]の前立ちて、今入りし少女に「ロオレイ」の画を指さし示して、「君にかれしはこれなり。面白げに笑ひたはぶれ玉ふときは、さしもおもはれねど、をりをり君がおも影の、ここなる未成の人物にいとふさはしきときあり。」

少女は高く笑ひて。「物忘《ものわすれ》したまふな。おん身が『ロオレイ』の本《もと》の雛形、すみれ売の子は我なりとは、先の夜も告げしものを。」かくいひしが俄《にわか》に色を正して。「おん身は我を信じたまはず、げにそれも無理ならず。世の人は皆我を狂女なりといへば、さおもひたまふならむ。」この声 | 戯《たわぶれ》とは聞えず。

巨勢は半信半疑したりしが、忍びかねて少女にいふ、「余りに久しくさいなみ玉ふな。今も我が額《ぬか》に燃ゆるは君が唇なり。はかなき戯とおもへば、しひて忘れむとせしこと、幾度《いくたび》か知らねど、迷《まよい》は遂に晴れず。あはれ君がまことの身の上、苦しからずは聞かせ玉へ。」

窓《まど》の下《もと》なる小机に、いま行李《こり》より出したる旧《ふる》き絵入新聞、遣《つか》ひしたる油《あぶら》系の具《ぐ》の錫筒《すずづつ》、粗末なる烟管《キセル》にまだ巻烟草《まきタバコ》の端《はし》の残れるなど載せたるその片端に、巨勢はつら杖《づえ》つきたり。少女は前なる籐《とう》の椅子《いす》に腰かけて、語りいでぬ。

「まづ何事よりか申さむ。この学校にて雛形の鑑札受くるときも、ハンスルといふ名にて通したれど、そは我 | 真《まこと》の名にあらず。父はスタインバハとて、今の国王に愛《め》でられて、ひと時 | 栄《さか》えし画工なりき。わが十二の時、王宮の冬園《ふゆその》[# 「冬園」の左に「ヴィンテルガルテン」とルビ、51-12]に夜会ありて、二親みな招かれぬ。宴《うたげ》闌《たけなわ》なる頃、国王見えざりければ、人々驚きて、移植《うつしう》ゑし熱帯 | 草木《そうもく》いやが上に茂れる、硝子《ガラス》屋根の下、そこかここかと捜しもとめつ。園《その》の片隅にはタンダルヅニスが刻《きざ》める、ファウストと少女との名高き石像あり。わが父のそのあたりに来たりし時、胸 | 裂《さ》くるやうなる声して、『助けて、助けて』と叫ぶものあり。声をするべに、黄金《こがね》の穹窿《まるでんじょう》おほひたる、『キオスク』（四阿屋《あずまや》）の戸口に立寄れば、周囲に茂れる櫻櫚《しゅろ》の葉に、瓦斯燈《ガスとう》の光支へられたるが、濃き五色にて画きし、窓硝子を洩《も》りてさしこみ、薄暗くあやしげなる影をなしたる裡《うち》に、一人の女の逃げむとすま

ふを、ひかへたるは王なり。その女のおもて見し時の、父が心はいかなりけむ。かれは我母なりき。父はあまりの事に、しばしたゆたひしが、『許したまへ、陛下《へいか》』と叫びて、王を推倒《おしたお》しつ。そのひまに母は走りのきしが、不意を打たれて倒れし王は、起き上りて父に組付きぬ。肥《こ》えふとりて多力なる国王に、父はいかでか敵し得べき、組敷かれて、側《かたわら》なりし如露《じょろ》にてしたたか打たれぬ。この事知りて諫《いさ》めし、内閣の秘書官チグレルは、ノイシュワンスタインなる塔に押籠《おしこ》めらるるはずなりしが、救ふ人ありて助けられき。われはその夜家にありて、二親の帰るを待ちしに、下女《はしため》来て父母帰り玉ひぬといふ。喜びて出迎ふれば、父 | 昇《か》かれて帰り、母は我を抱きて泣きぬ。」

少女は暫《しば》らく黙しつ。けさより曇りたる空は、雨になりて、をりをり窓を打つ雫《しずく》、はらはらと音す。巨勢いふ。「王の狂人となりて、スタルンベルヒの湖に近き、ベルヒといふ城に遷《うつ》され玉ひしことは、きのふ新聞にて読みしが、さてはその頃よりかかる事ありしか。」

少女は語を継《つ》ぎて。「王の繁華の地を嫌ひて、鄙《ひな》に住まひ、昼寝ねて夜起きたまふは、久しきほどの事なり。独逸《ドイツ》、仏蘭西《フランス》の戦《いくさ》ありし時、加特力《カトリック》派の国会に打勝ちて、普魯西《プロシヤ》方につきし、王が中年のいさをは、次第に暴政の噂《うわさ》に掩《おお》はれて、公けにこそ言ふものなけれ、陸軍大臣メルリングル、大蔵大臣リイデルなど、故なくして死刑に行はれむとしたるを、その筋にて秘めたるは、誰知らぬものなし。王の昼寝し玉ふときは、近衆《きんじゅう》みな却《しりぞ》けられしが、囁語《うわこと》にマリイといふこと、あまたたびいひたまふを聞きしもありといふ。我母の名もマリイといひき。望なき恋は、王の病を長ぜしにあらずや。母はかほばせ我に似たる処ありて、その美しさは宮の内にて類《たぐい》なかりきと聞きつ。」

「父は間もなく病みて死にき。交《まじわり》広く、もの惜《おし》みせず、世事には極めて疎《うと》かりければ、家に遺財つゆばかりもなし。それよりダハハウエル街の北のはてに、裏屋の二階明きたりしを借りて住みしが、そこに遷りてより、母も病みぬ。かかる時にうつろふものは、人の心の花なり。数知らぬ苦しき事は、わが穉《おさな》き心に、早く世の人を憎ましめき。明《あく》る年の一月、謝肉祭の頃なりき、家財衣類なども売尽して、日々の烟《けぶり》も立てかぬるやうになりしかば、貧しき子供の群に入りてわれも堇花《すみれ》売ることを覚えつ。母のみまかる前、三日四日のほどを安く送りしは、おん身の賜《たまもの》なりき。」

「母のなきがら片付けなどするとき、世話せしは、一階高くすまひたる裁縫師なり。あはれなる孤《みなしご》ひとり置くべきにあらずとて、迎取られしを喜びしこと、今おもひ出しても口惜《くや》しきほどなり。裁縫師には、娘二人ありて、いたく物ごのみして、みづから衞《てら》ふさまなるを見しが、迎取られてより伺《うかが》へば、夜に入りてしばしば客あり。酒など飲みて、はては笑ひ罵《ののし》り、また歌ひなどす。客は外国《とつくに》の人多く、おん国の学生なども見えしやうなりき。或る日 | 主人《あるじ》われにも新しき衣《きぬ》着よといひしが、そのをりその男の我を見て笑ひし顔、何となく怖《おそ》ろしく、子供心にもうれしとはおもはざりき。午《ひる》すぎし頃、四十ばかりなる知らぬ人来て、スタルンベルヒの湖水へ往《ゆ》かむといふを、主人も俱《とも》に勤《すす》めき。父の世にありしとき、伴はれてゆきし嬉しさ、なほ忘れざりしかば、しぶしぶ諾《うべな》ひつるを、「かくてこそ善《よ》き子なれ」とみな誉《ほ》めつ。連れなる男は、途《みち》にてやさしくのみ扱ひて、かしこにては『バウリア』といふ座敷船《ザロンドムフェル》に乗り、食堂にゆきて物食はせつ。酒もすすめぬれど、そは慣れぬものなれば、辞《いな》みて飲まざりき。ゼエスハウプトに船はてしとき、その人はまた小舟を借り、これに乗りて遊ばむといふ。暮れゆくそらに心細くなりしわれは、はやかへらむといへど、聴かずして漕出《こぎい》で、岸边に添ひてゆくほどに、人げ遠き葦間《あしま》に来《きた》りしが、男は舟をそこに停《と》めつ。わが年はまだ十三にて、初《はじめ》は何事ともわきまへざりしが、後《のち》には男の顔色もかはりておそろしく、われにでもあらで、水に躍入《おどりい》りぬ。暫しありて我にかへりしときは、湖水の畔《ほとり》なる漁師《りょうし》の家にて、貧しげなる夫婦のものに、介抱せられてあたりき。帰るべき家なしと言張りて、一日《ひとひ》二日《ふたひ》と過《すぐ》す中《うち》に、漁師夫婦の質朴なるに馴染《なじ》みて、不幸なる我身の上を打明けしに、あはれがりて娘として養ひぬ。ハンスルといふは、この漁師の名なり。」

「かくて漁師の娘とはなりぬれど、弱き身には舟の櫂《かじ》取ることもかなはず、レオニのあたりに、富める英吉利人《イギリスびと》の住めるに雇《やと》はれて、小間使《こまづかい》になりぬ。加特力教《カトリックきょう》信ずる養父母は、英吉利人に使はるるを嫌ひぬれど、わが物読むことなど覚えしは、彼《かの》家なりし雇女教師《やといじょきょうし》[# 「雇女教師」の左に「ゲルナント」とルビ、55-10] の恵《めぐみ》なり。女教師は四十余の処女《しょじょ》なりしが、家の娘のたかぶりたるよりは、我を愛すること深く、三年《みとせ》がほどに多くもあらぬ教師の蔵書、悉《ことごと》く読みき。ひがよみはさこそ多かりけめ。またふみの種類もまちまちなりき。クニッゲが交際法あれば、フムボルトが長生術あり。ギョオテ、シルレルの詩抄半ばじゆしてキョオニヒが通俗の文学史を繙《ひもと》き、あるはルウヴル、ドレスデンの画堂の写真絵、繰りひろげて、テエヌが美術論の訳書をあさりぬ。」

「去年《こぞ》英吉利人一族を率ゐて国に帰りし後は、然《しか》るべき家に奉公せばやとおもひしが、身元 | 善《よ》からねば、ところの貴族などには使はれず。この学校の或る教師に、端《はし》なくも見出されて、雛形《モデル》勤めしが縁《えにし》になりて、遂に鑑札受くることとなりしが、われを名高きスタインバハが娘

なりとは知る人なし。今は美術家の間に立ちまじりて、唯《ただ》面白くのみ日を暮せり。されどグスタフ・フライタハはさすがそら言《ごと》いひしにあらず。美術家ほど世に行儀 | 悪《あ》しきものなれば、独立《ひとりた》ちて交《まじわ》るには、しばしも油断すべからず。寄らず、障《さわ》らぬやうにせばやとおもひて、計《はか》らず見玉《みたま》ふ如き不思議の癡者《くせもの》になりぬ。をりをりは我身、みづからも狂人にはあらずやと疑ふばかりなり。これにはレオニにて読みしふみも、少《すこ》し崇《たたり》をなすかとおもへど、もし然《さ》らば世に博士と呼ばれる人は、そもそもいかなる狂人ならむ。われを狂人と罵る美術家ら、おのれらが狂人ならぬを憂へこそすべきなれ。英雄豪傑、名匠大家となるには、多少の狂気なくて [# 「りっしんべん + (はこがまえ < 夾)」、第3水準1-84-56] 《かな》はぬことは、ゼネカが論をも、シエエクスピアが言《げん》をも待《ま》たず。見玉へ、我学問の博《ひろ》きを。狂人にして見まほしき人の、狂人ならぬを見る、その悲しさ。狂人にならでもよき国王は、狂人になりぬと聞く、それも悲し。悲しきことのみ多ければ、昼は蟬《せみ》と共に泣き、夜は蛙《かわず》と共に泣けど、あはれといふ人もなし。おん身のみは情《つれ》なくあざみ笑ひ玉はじとおもへば、心のゆくままに語るを咎《とが》め玉ふな。ああ、かういふも狂気か。」

下

定《さだめ》なき空に雨 | 歇《や》みて、学校の庭の木立《こだち》のゆるげるのみ曇りし窓の硝子《ガラス》をとほして見ゆ。少女《おとめ》が話聞く間、巨勢《こせ》が胸には、さまざまの感情戦ひたり。或ときはむかし別れし妹に逢《あ》ひたる兄の心となり、或ときは廃園に僵《たお》れ伏《ふ》したるエヌスの像に、独《ひとり》悩める彫工の心となり、或るときはまた艶女《えんにょ》に心動され、われは墮《お》ちじと戒むる沙門《しゃもん》の心ともなりしが、聞きをはりし時は、胸騒ぎ肉 | 顫《ふる》ひて、われにもあらで、少女が前に跪《ひざまず》かむとしつ。少女はつと立ちて「この部屋の暑さよ。はや学校の門もささる頃なるべきに、雨も晴れたり。おん身とならば、おそろしきこともなし。共にスタルンベルヒへ往《ゆ》き玉はずや。」と側《そば》なる帽《ぼう》取りて戴《いただ》きつ。そのさま巨勢が共に行くべきを、つゆ疑はずと覺《おぼ》し。巨勢は唯《ただ》母に引かる穉子《おさなご》の如く従ひゆきぬ。

門前にて馬車 | 雇《やと》ひて走らすに、ほどなく停車場に来ぬ。けふは日曜なれど、天気 | 悪《あ》しければにや、近郷《きんこう》よりかへる人も多からで、ここはいと静《しずか》なり。新聞の号外売の婦人あり。買ひて見れば、国王ベルヒの城に遷《うつ》りて、容体《ようだい》穏なれば、侍医グッデンも護衛を弛《ゆる》めさせきとなり。 [# 「さんずい + 氣」、第4水準2-79-6] 車《きしゃ》中には湖水の畔《ほとり》にあさ避くる人の、物買ひに府に出でし帰るさなるが多し。王の噂《うわさ》いと喧《かまびす》し。「まだホオヘンシュワンガウの城にみたまひし時には似ず、心 | 鎮《しず》まりたるやうなり。ベルヒに遷さる途中、ゼエスハウプトにて水求めて飲みたまひしが、近きわたりなりし漁師《りょうし》らを見て、やさしく頷《うなず》きなどしたまひぬ。」と訛《だ》みたることばにて語るは、かひもの籠《かご》手にさげたる老女《おうな》なりき。

車走ること一時間、スタルンベルヒに着きしは夕《ゆうべ》の五時なり。かちより往《ゆ》きてやうやう一日ほどの処なれど、はやアルペン山の近さを、唯何となく覚えて、このくもらはしき空の気色《けしき》にも、胸開きて息せらる。車のあちこちと廻来《まわりこ》し、丘陵の忽《たちまち》開けたる処に、ひろびろと見ゆるは湖水なり。停車場は西南の隅にありて、東岸なる林木、漁村はゆふ霧に包まれてほのかに認めらるれど、山に近き南の方は一望きはみなし。

案内《あない》知りたる少女に引かれて、巨勢は右手《めて》なる石段をのぼりて見るに、ここは「パウリア」の庭《ホオフ》といふ「ホテル」の前にて、屋根なき所に石卓《いしづくえ》、椅子《いす》など並べたるが、けふは雨後なればしめじめと人げ少し。給仕する僕《しもべ》の黒き上衣《うわぎ》に、白の前掛したるが、何事をつづきやきつつも、卓に倒しかけたる椅子を、引起して拭《ぬぐ》ひゐたり。ふと見れば片側の軒《のき》にそひて、つた蔓《かずら》からませたる架《たな》ありて、その下《もと》なる円卓《まるづくえ》を囲みたるひと群《むれ》の客あり。こはこの「ホテル」に宿りたる人々なるべし。男女打ちまじりたる中に、先の夜「ミネルワ」にて見し人ありしかば、巨勢は往きてものいはむとせしに、少女おしとどめて。「かしこなるは、君の近づきたまふべき群にあらず。われは年若き人と二人にて来たれど、愧《は》づべきはかなたにありて、こなたにあらず。彼はわれを知りたれば、見玉へ、久しく座にえ忍びあへで隠るべし。」とばかりありて、彼《かの》美術諸生は果して起《た》ちて「ホテル」に入りぬ。少女は僕を呼びちかづけて、座敷船はまだ出づべしやと問ふに、僕は飛行く雲を指さして、この覺束《おぼつか》なきそらあひなれば、最早《もはや》出《い》でざるべしといふ。さらば車にてレオニに行かばやとて言付けぬ。

馬車来ぬれば、二人は乗りぬ。停車場の傍《かたえ》より、東の岸辺を奔《はし》らす。この時アルペンおろしさと吹来て、湖水のかたに霧立ちこめ、今出でし辺《ほとり》をふりかへり見るに、次第々々に鼠色《ねずみいろ》になりて、家の棟《むね》、木のいただきのみ一きは黒く見えたり。御者ふりかへりて、「雨なり。母衣《ほろ》掩《おお》ふべきか。」と問ふ。「否《いな》」と応《こた》へし少女は巨勢に向ひて。「ここちよの

この遊《あそび》や。むかし我命 | 喪《うしな》はむとせしもこの湖の中なり。我命拾ひしもまたこの湖の中なり。さればいかでとおもふおん身に、真心《まごころ》打明けてきこえむもここにてこそと思へば、かくは誘《さそ》ひまつりぬ。『カッフェエ・ロリアン』にて恥かしき目にあひけるとき、救ひ玉はりし君をまた見むとおもふ心を命にて、幾歳《いくとせ》をか経にけむ。先の夜『ミネルワ』にておん身が物語聞きしときのうれしさ、日頃木のはしなどのやうにおもひし美術諸生の仲間なりければ、人あなづりして不敵の振舞《ふるまい》せしを、はしたなしとや見玉ひけむ。されど人生いくばくもあらず。うれしとおもふ一弾指《いちだんし》の間に、口張りあけて笑はずば、後にくやしくおもふ日あらむ。」かくいひつつ被《かぶ》りし帽を脱棄《ぬぎす》てて、こなたへふり向きたる顔は、大理石脈《だいいりせきみゃく》に熱血 | 跳《おど》る如くにて、風に吹かるる金髪は、首《こうべ》打振りに長く嘶《いば》ゆる駿馬《しゅんめ》の鬣《たてがみ》に似たりけり。「けふなり。けふなり。きのふありて何かせむ。あすも、あさても空《むな》しき名のみ、あだなる声のみ。」

この時、二点三点、粒太《つぶふと》き雨は車上の二人が衣《きぬ》を打ちしが、瞬《またた》くひまに繁くなりて、湖上よりの横しぶき、あららかにおとづれ来て、紅《べに》を潮《さ》したる少女が片頬《かたほお》に打ちつくるを、さし覗《のぞ》く巨勢が心は、唯そらにのみやなりゆくらむ。少女は伸びあがりて、「御者、酒手《さかて》は取らすべし。疾《と》く駆《か》れ。一策《ひとむち》加へよ、今一策。」と叫びて、右手《めて》に巨勢が頸《うなじ》を抱《いだ》き、己《おの》れは項《うなじ》をそらせて仰視《あおぎみ》たり。巨勢は絮《わた》の如き少女が肩に、我 | 頭《かしら》を持たせ、ただ夢のこちしてその姿を見たりしが、彼《かの》凱旋門《がいせんもん》上の女神パワリアまた胸に浮びぬ。

国王の棲《す》めりといふベルヒ城の下《もと》に来《こ》し頃は、雨いよいよ劇《はげ》しくなりて、湖水のかたを見わたせば、吹寄する風一陣々、濃淡の豎縞《たてじま》おり出して、濃《こ》き処には雨白く、淡《あわ》き処には風黒し。御者は車を停めて、「しばしがほどなり。余りに濡《ぬ》れて客人《まろうど》も風や引き玉はむ。また旧《ふる》びたれどもこの車、いたく濡らさば、主人《あるじ》の嗔《いかり》に逢《あ》はむ。」といひて、手早く母衣 | 打掩《うちおお》ひ、また一鞭《ひとむち》あてて急ぎぬ。

雨なほをやみなくふりて、神おどろおどろしく鳴りはじめぬ。路《みち》は林の間に入りて、この国の夏の日はまだ高かるべき頃なるに、木下道《このしたみち》ほの暗うなりぬ。夏の日に蒸《む》されたりし草木の、雨に湿《うるお》ひたるかをり車の中に吹入るを、渴《かつ》したる人の水飲むやうに、二人は吸ひたり。鳴神《なるかみ》のおとの絶間《たえま》には、おそろしき天氣に怯《おく》れたりとも見えぬ「ナハチガル」鳥の、玲瓏《れいろう》たる声振りたててしばなけるは、淋しき路を独《ひとり》ゆく人の、ことさらに歌うたふ類《たぐい》にや。この時マリイは諸手《もろて》を巨勢が項に組合せて、身のおもりを持たせかけたりしが、木蔭を洩《も》る稲妻に照らされたる顔、見合せて笑《えみ》を含みつ。あはれ二人は我を忘れ、わが乗れる車を忘れ、車の外なる世界をも忘れてたりけむ。

林を出でて、阪路《さかみち》を下るほどに、風 | 村雲《むらくも》を払ひさりて、雨もまた歇《や》みぬ。湖の上なる霧は、重ねたる布を一重《ひとえ》、二重と剥《は》ぐ如く、束《つか》の間《ま》に晴れて、西岸なる人家も、また手にとるやうに見ゆ。唯ここかしこなる木下蔭を過《す》ぐるごとに、梢《こずえ》に残る露の風に払はれて落つるを見るのみ。

レオニにて車を下りぬ。左に高く聳《そばだ》ちたるは、いはゆるロットマンが岡にて、「湖上第一勝」と題したる石碑《せきひ》の建てる処なり。右に伶人《れいじん》レオニが開きぬといふ、水に臨《のぞ》める酒店《さかみせ》あり。巨勢が腕《かいな》にもろ手からみて、縋《すが》るやうにして歩みし少女は、この店の前に来て岡の方をふりかへりて、「わが雇はれし英吉利人《イギリスびと》の住みしは、この半腹《はんぷく》の家なりき。老いたるハンスル夫婦が漁師小屋も、最早百歩がほどなり。われはおん身をかしこへ、伴はむとおもひて来《こ》しが、胸騒ぎて堪《た》へがたければ、この店にて憩《いこ》はばや。」巨勢は現《げ》にもとて、店に入りて夕餉《ゆうげ》詔《あつら》ふるに、「七時ならでは整はず、まだ三十分待ち給はではかなはじ、」といふ。ここは夏の間のみ客ある処にて、給仕する人もその年々に雇ふなれば、マリイを識《し》れるもなかりき。

少女はつと立ちて、栈橋《さんばし》に繋《つな》ぎし舟を指さし、「舟 | 漕《こ》ぐことを知り玉ふか。」巨勢、「ドレスデンにありし時、公園のカロラ池にて舟漕ぎしことあり、善くすといふにあらねど、君 | 独《ひと》りわたさむほどの事、いかで做得《なしえ》ざらむ。」少女、「庭なる椅子《いす》は濡《ぬ》れたり。さればとて屋根の下は、あまりに暑し。しばし我を載せて漕ぎ玉へ。」

巨勢はぬぎたる夏外套《なつがいとう》を少女に被《き》せて小舟《おぶね》に乗らせ、われは櫂《かい》取りて漕出《こぎい》でぬ。雨は歇みたれど、天なほ曇りたるに、暮色は早く岸のあなたに来ぬ。さきの風に揺られたるなごりにや、[# 「木 + 世」、第3水準1-85-56] 敲《かじたた》くほどの波はなほありけり。岸に沿ひてベルヒの方《かた》へ漕ぎ戻すほどに、レオニの村落果つるあたりに来ぬ。岸辺の木立《こだち》絶えたる処に、真砂路《まさごじ》の次第に低くなりて、波打際《なみうちぎわ》に長椅子 | 据《す》ゑたる見ゆ。蘆《あし》の一叢《ひとむら》舟に触れて、さわさわと声するをりから、岸辺に人の足音して、木の間を出づる姿あり。身の長《たけ》六尺に近く、黒き外套を着て、手にしばめたる蝙蝠傘《こうもりがさ》を持ちたり。左手《ゆんで》に少し引きさがりて随《したが》ひたるは、鬚《ひげ》も髪も皆雪の如くなる翁《おきな》なりき。前な

る人は俯《うつむ》きて歩み来《き》ぬれば、縁《ふち》広き帽に顔隠れて見えざりしが、今|木《こ》の間《ま》を出でて湖水の方に向ひ、しばし立ちとどまりて、片手に帽をぬぎ持ちて、打ち仰ぎたるを見れば、長き黒髪を、後《うしろ》ざまにかきて広き額《ぬか》を露《あら》はし、面《おもて》の色灰のごとく蒼《あお》きに、窪《くぼ》みたる目の光は人を射たり。舟にては巨勢が外套を背に着て、蹲《うずく》まりゐたるマリイ、これも岸なる人を見ゐたりしが、この時|俄《にわか》に驚きたる如く、「彼は王なり」と叫びて立ちあがりぬ。背なりし外套は落ちたり。帽はさきに脱ぎたるまま、酒店に置いて出でぬれば、乱れたるこがね色の髪は、白き夏衣《なつごろも》の肩にたをたをとかかりたり。岸に立ちたるは、実に侍医グッデンを引つれて、散歩に出でたる国王なりき。あやしき幻の形を見る如く、王は恍惚《こうこつ》として少女の姿を見てありしが、忽《たちまち》一声「マリイ」と叫び、持ちたる傘投棄てて、岸の浅瀬をわたり来ぬ。少女は「あ」と叫びつつ、そのまま気を喪《うしな》ひて、巨勢が扶《たす》くる手のまだ及ばぬ間《ま》に僵《たお》れしが、傾く舟の一揺りゆらると共に、うつ伏《ぶせ》になりて水に墜《お》ちぬ。湖水はこの処にて、次第々々に深くなりて、勾配《こうばい》ゆるやかなりければ、舟の停《とど》まりしあたりも、水は五尺に足らざるべし。されど岸辺の砂は、やうやう粘土まじりの泥となりたるに、王の足は深く陥《おち》いりて、あがき自由ならず。その隙《ひま》に随《したが》ひたりし翁は、これも傘投捨てて追ひすがり、老いても力や衰へざりけむ、水を蹴《けり》て二足《ふたあし》三足《みあし》、王の領首《えりくび》むづと握りて引戻さむとす。こなたは引かれじとするほどに、外套は上衣と共に翁が手に残りぬ。翁はこれがかいやり棄てて、なほも王を引寄せむとするに、王はふりかへりて組付き、かれこれたがひに声だに立てず、暫し揉合《もみあ》ひたり。

これ唯《ただ》一瞬間の事なりき。巨勢は少女が墜《お》つる時、僅《わずか》に裳《も》を握みしが、少女が蘆間隠れの杣《くい》に強く胸を打たれて、沈まむとするを、やうやうに引揚《ひきあ》げ、汀《みぎわ》の二人が争ふを跡に見て、もと来《こ》し方《かた》へ漕ぎ返しつ。巨勢は唯|奈何《いか》にもして少女が命助けむと思ふのみにて、外《ほか》に及ぶに違《いとま》あらざりしなり。レオニの酒店の前に来しが、ここへは寄らず、これより百歩がほどなりと聞きし、漁師夫婦が苫屋《とまや》をさして漕ぎゆくに、日もはや暮れて、岸には「アイヘン」、「エルレン」などの枝繁りあひ広がりて、水は入江の形をなし、蘆にまじりたる水草に、白き花の咲きたるが、ゆふ闇《やみ》にほの見えたり。舟には解けたる髪の水にまみれしに、藻屑《もくず》かかりて僵《たお》れふしたる少女の姿、たれかあはれと見ざらむ。をりしも漕来る舟に驚きてか、蘆間を離れて、岸のかたへ高く飛びゆく螢《ほたる》あり。あはれ、こは少女が魂《たま》のぬけ出でたるにはあらずや。

しばしありて、今まで木影《こかげ》に隠れたる苫屋の燈《ともしび》見えたり。近寄りて、「ハンスルが家はこかなりや、」とおとなへば、傾きし簷端《のきば》の小窓|開《あ》きて、白髪の老女《おうな》、舟をさしのぞきつ。「ことしも水の神の贅《にえ》求めつるよ。主人《あるじ》はベルヒの城へきのふより駆《か》りとられて、まだ帰らず。手当《てあて》して見むとおもひ玉はば、こなたへ。」と落付きたる声にていひて、窓の戸ささむとしたりしに、巨勢は声ふりたてて、「水に墜ちたるはマリイなり、そなたのマリイなり、」といふ。老女は聞きも畢《おわ》らず、窓の戸を開け放ちたるままにて、棧橋《さんばし》の畔《ほとり》に馳出《は》せいで、泣く泣く巨勢を扶《たす》けて、少女を抱きいれぬ。

入りて見れば、半ば板敷にしたるひと間のみ。今火を点《とも》したりと見ゆる小「ランプ」竈《かまど》の上に微《かすか》なり。四方《よも》の壁に糸がきたる粗末なる耶蘇《ヤソ》一代記の彩色画は、煤《すす》に包まれておぼろげなり。藁火焚《わらびた》きなどして介抱しぬれど、少女は蘇《よみがえ》らず。巨勢は老女と屍《かばね》の傍《かたわら》に夜をとほして、消えて迹《あと》なきうたかたのうたてき世を啣《かこ》ちあかしつ。

時は耶蘇曆千八百八十六年六月十三日の夕《ゆうべ》の七時、バウリア王ルウド斗ヒ二世は、湖水に溺《おぼ》れて [# 「歹+且」、第3水準1-86-38] 《そ》せられしに、年老いたる侍医グッデンこれを救はむとて、共に命を殞《おと》し、顔に王の爪痕《そうこん》を留《とど》めて死したりといふ、おそろしき知らせに、翌《あくる》十四日ミュンヘン府の騒動はおほかたならず。街の角々には黒縁《くろぶち》取りたる張紙《はりがみ》に、この訃音《ふいん》を書きたるありて、その下には人の山をなしたり。新聞号外には、王の屍見出だしつるをりの模様に、さまざまの臆説《おくせつ》附けて売るを、人々争ひて買ふ。点呼に應ずる兵卒の正服つけて、黒き毛植系たるバウリア [# 「(矛+夕)/金」、第3水準1-93-30] 《かぶと》戴《いただ》ける、警察吏の馬に騎《の》り、または徒立《かちだち》にて馳《は》せちがひたるなど、雑沓《ざつとう》いはんかたなし。久しく民に面《おもて》を見せたまはざりし国王なれど、さすがにいたましがりて、憂《うれい》を含みたる顔も街に見ゆ。美術学校にもこの騒ぎにまぎれて、新《あらた》に入《いり》し巨勢がゆくへ知れぬを、心に掛くるものなかりしが、エキステル一人は友の上を気づかひゐたり。

六月十五日の朝《あした》、王の柩《ひつぎ》のベルヒ城より、真夜中に府に遷《うつ》されしを迎へて帰りし、美術学校の生徒が「カフエエ・ミネルワ」に引上げし時、エキステルはもしやと思ひて、巨勢が「アトリエ」に入りて見しに、彼はこの三日がほどに相貌《そうぼう》変りて、著《し》るく瘦《や》せたる如く、「ロオレイ」の図の下に跪《ひざまず》きてぞゐたりける。

国王の横死《おうし》の噂《うわさ》に掩《おお》はれて、レオニに近き漁師ハンスルが娘一人、おなじ時に溺れぬといふこと、問ふ人もなくて已《や》みぬ。

底本：「舞姫・うたかたの記 他三篇」岩波文庫、岩波書店

1981（昭和56）年1月16日初版発行

1999（平成11）年7月15日36刷

底本の親本：「鷗外全集 第二巻」岩波書店

1971（昭和46）年12月初版発行

入力：よしだひとみ

校正：松永正敏

2000年7月18日公開

2006年5月15日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<http://www.aozora.gr.jp/>）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。